

II 中間育成

今年度の中間育成はすべて栽培漁業センターの陸上水槽で行なった。5月上旬から8月上旬の間に4回の各種苗生産に引き続き、4回次延べ5水槽を使用した。飼育水槽は種苗生産同様屋内50kl水槽（径7m、深1.3m）及び100kl水槽（径10m、深1.3m）を使用し、水量は25kl～100klで行い、1/2～2回転/日になるように流水飼育を行なった。表3に中間育成結果を示した。1回次は26千尾のC₁稚ガニを10日間飼育しC₃～C₅稚ガニ4,6千尾を取り上げた。餌料はアサリを夕方1回給餌した。2回次No.2は44,3千尾のC₁稚ガニを13日間飼育し6,7千尾のC₄～C₅稚ガニを取り上げた。餌料は配合飼料を朝夕2回給餌した。2回次No.3は116千尾のC₁稚ガニを11日間飼育し16,6千尾のC₃～C₅稚ガニを取り上げた。餌料は朝にアサリを夕方に配合飼料を給餌した。3回次は80,7千尾のC₁稚ガニを13日間の飼育し12,3千尾のC₄～C₅稚ガニを取り上げた。餌料はNo.3と同じであった。4回次は131,1千尾のC₁稚ガニを7日間飼育し56,9千尾取り上げた。餌料は配合飼料で朝夕の2回給餌した。以上4回の中間育成で合計398,1千尾を飼育し、97,1千尾のC₃～C₅稚ガニを取り上げた。平均生残率は24.4%であった。

4回次5水槽の飼育の中で4-No.5が生残率43.4%と非常によい結果であったが、他の4水槽では14.3～17.7%とそれほど高くはなかった。この4-No.5は飼育期間7日間で5例中最も短期間で、取り上げサイズもC₃～C₄と最も小さく、種苗生産段階のC₁の活力が最も良好であった。また水量100klと他の水槽より多く、投入したキンランが水中で密集せず、さらに投餌量が少なかったため底の汚れが少なかった。

今後は給餌方法、水量の増加、適正収容密度、シェルターとしてのキンランの配置等を検討したい。

表3 タイワンガザミの中間育成結果

回-No	開始～終了 月/日～月/日	期間 日	水槽(水量) KL	収容尾数 尾	開始時 収容密度 尾/KL	取上げ尾数 尾	取上げ時 収容密度 尾/KL	生残率 %	取上げ サイズ	餌料	備考
1-1	5/6～5/16	10	50(25)	26,000	1,040	4,600	184	17.7	C ₃ ～ ₅	アサリ	キンラン105本
2-2	6/1～6/14	13	50(25)	44,300	1,772	6,700	288	15.1	C ₄ ～ ₅	配合飼料	キンラン無し
3	6/3～6/14	11	100(50)	116,000	2,320	16,600	332	14.3	C ₃ ～ ₅	アサリ 配合飼料	キンラン200本
3-4	7/1～7/14	13	50(25)	80,700	3,228	12,300	492	15.2	C ₄ ～ ₅	アサリ 配合飼料	キンラン296本
4-5	7/25～8/1	7	100(100)	131,100	1,311	56,900	569	43.4	C ₃ ～ ₄	配合飼料	キンラン281本
計				398,100		97,100		24.4			